



# 昭和小だより



11月から約1ヵ月間は人権について考える人権月間とし、人権・同和教育計画に基づいて、友だちを尊重し、強い心で日常の差別や偏見を解消し、互いに助け合って生活をしていこうとする態度を育てることを目標としています。昭和小学校の今年度のテーマは「みんな違って みんないい ～自分も大切に 相手も大切に～」です。みんなが安心して、心地よく生活できる場所にしなければならないと全教職員が一丸となって人権・同和教育に取り組んでいます。各クラスで人権について特に意識して過ごしたいことを話し合い、「ころぼかぼか宣言」を作りました。また、道徳や学活などの学習を通して、人権学力を高める取り組みをしています。「人権学力」とは、人権・同和教育に関する知識を身に付けるだけでなく、それを日々の生活の中で実践・活用できる能力のことです。人権・同和教育を「自分ごと」として捉え、解決に向けて行動する力です。

## 平和への誓い ～ 継承していく使命 ～

11月4日に6年生が広島平和学習へ行って来ました。原爆ドームや平和記念公園の見学、原爆の子の像では、平和の願いを込め、「昭和小平和への誓い」を唱え、千羽鶴を捧げました。

広島平和記念資料館では、被爆体験証言者である梶本さんのお話を聞きました。梶本さんは、高等女学校3年生（14歳）の時に、爆心地から2.3km離れた動員先の工場で作業中に被爆しました。



梶本さんは、「原子爆弾を投下されたことが過去のものとなっている」「原爆のことをしっかりと学んでほしい」と静かに語り始めました。



そして、原爆が投下された時の様子を語ってくれました。梶本さんは、作業をする工場の中にいたそうです。原子爆弾が爆発した瞬間「ピカッ」と真っ青な光が見え、爆風と熱風の影響で、地球が爆発したような激しい爆発と同時に地面が浮き上がり、2階の屋根が崩れ下敷きになっていたそうです。「早くここから出ないと火事になる」「自分はここで死ぬんだ」と覚悟したと言っていました。また、原爆が投下された直後の広島の様子は「街や人・植物の全てが焼かれて、まさに地獄そのものだった」とおっしゃっていました。私が印象に残った言葉は「14歳の女の子（梶本さん）が人間の感情がなくなってしまった。最初は死体を見ると『怖い』という感情があったけれど、死体の多さに、人の死体を見ても怖いという感情がなくなってしまった。戦争は、普通の感情ではなく人間を異常な感情にしてしまう。人間の感情が

なくなってしまう」という言葉に、私は、原子爆弾や戦争の恐ろしさを痛感しました。

最後に梶本さんから6年生に3つのお願いを託してくれました。1つ目は「命を大切にしてください」戦争で生きたくても生きることのできなかった命があります。自分の命、他人の命、家族の命、すべての命を大切にしてください。2つ目は「核兵器を1つでもなくしていきたい」今現在、世界には約1万2000個の核兵器があるそうです。梶本さんは「核兵器使用について今一番危険な状態にある」と危惧されています。3つ目は「核兵器の恐ろしさを伝えてください」「平和学習で自分自身が感じたことや考えたことを伝えていくことがあなた達の役目です」と梶本さんは私たちに語り継いでくれました。私は今ある平和は、戦争でたくさんの命が失われたことの礎のもとにあると考えています。だからこそ、今ある平和を大切にしていかなければならないのです。